



ハーブ通信

2007年

12月号

(第19号)

<http://www.hurp.info>

憲法60年の軌跡を映像で検証！

## 第5回平和ドキュメンタリー映画上映会

2007年11月24日

上映作品：

「日本の中のベトナム戦争」

(1967年、20分)

「われわれは監視する

—核基地横須賀」

(1975年、荒井英郎監督、48分)

平和ドキュメンタリー映画連続上映会も、今回の5回目で一つの区切りを迎えることになりました。

「日本の中のベトナム戦争」は、ベトナム戦争（1959年—1975年に、インドシナ戦争後、ベトナムの南北統一をめぐる戦われた戦争）に、米軍と日本がどのように関わっていたかを伝える映像です。

ベトナム戦争は形式的には北ベトナムと南ベトナムの戦争でしたが、実質的には共産主義勢力（ソビエト連邦、中華人民共和国）と資本主義勢力（アメリカ）が背後にあっての戦いで、「代理戦争」とも呼ばれました。

ベトナム戦争は当時高度成長期にあった日本にも大きな影響を与えました。ベトナム戦争の期間中、日米安保条約のもと、開戦当時アメリカ軍の統治下にあった沖縄や横須賀などの軍事基地の提供や、補給基地としてアメリカ政府を支え続け、1970年には安保条約を延長しました。

横浜港に集められた戦争に必要な物資、弾薬が港を出て行き、ベトナムの人を殺します。

沖縄は月一万回の離着陸数を数える補給基地でした。「沖縄は米軍にとって自分の国よりも自由なところだ」という米兵の言葉は、米軍が当時沖縄をどうとらえていたかを示しているのではない

のでしょうか。

「われわれは監視する—核基地横須賀」は、在日米軍の核装備を監視し続けて製作されたものです。

巨大な『軍港』横須賀には、空母ミッドウェーをはじめとする主力艦隊が出入りしています。その中に、核兵器を持ち込んでいるという疑いがあり、それを監視した映像です。映像では、異様な形（大きな円柱状）のコンテナが運ばれていました。「X-1・2」と呼ばれたそれらは、はたして核兵器なのか。

水兵のインタビューでは「carry newclear weapon？」の問いに「乗組員の中では核を積んでいるのはもはや常識だ」と答えていました。

日本には「非核三原則」政策が1967年に唱えられ、核エネルギーは平和目的にのみ利用するとして、核兵器製造につながる行為を自ら禁止しています。ただし、日本に入港する米国艦船及び米軍基地を日本政府が査察しているわけでもなく、「持ち込ませず」に関してはこの映像の通り、事実上形骸化してしまっています。

カメラを向けられて笑顔でピースサインを送る米兵の人たちは、『原爆の図』（後の「丸木美術館再訪」に詳しく載っています）を見たことはまずないのだろうかと思いました。

\*今回で連続上映会は一区切りとなりましたが、来年も様々な映像をみなさまに紹介して行きたいと思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

(T本)



# 法学館憲法研究所 連続講座「世界史の中の憲法」

## 第5回「戦争と平和の歴史」感想

ハーブの理事長で、法学館憲法研究所首席客員研究員の浦部法穂教授（名古屋大学）が、連続講座「世界史の中の憲法」全6回を終了し、現在、法学館のホームページから視聴することができます。今、なにかと話題にあがる憲法をより深く学び考えてみませんか。

### お申し込み：法学館憲法研究所HP

<http://www.jicl.jp/>

ハーブでは、毎月この講義を受講した方の感想を載せ、皆さんに講義の様子を体感してもらおうと思います。第5回はI橋さんに書いていただきました。

### ●第5回「戦争と平和の歴史」

今回は、いわば、戦争から見た世界史のダイジェスト。

何故人間は延々と戦争をしてきたか、そして今でもしているのかについては生物的・心理的な考察もあるが（それはそれでなかなか魅惑的なのだ）、ここではそういうことはひとまず捨象して、権力を持つ側とそれを行使される側の関係にしばって解説している。

近代以前の戦争は基本的に権力者（=王様）どうしの戦争で、民衆は、戦争に動員される側というよりは、略奪などによって一方的な犠牲になる側であった。それが大きく変っていくのがフランス革命で、ここで「自分たちの国家」という意識が芽生え、国家総力戦への布石ができる。「自分たちの

国家」という意識はフランスから周囲の国にも波及し、それを権力者が利用することで、多くの戦争は総力戦になり、死傷者の数は激増する。これが、近代の戦争がそれ以前と大きく違った点だ。また、時代が下るにつれて、軍人と民間人の死傷者の比率は、民間人に大きく偏っていくのも特徴だと言える。

皮肉なのは、「革命」と総力戦が不可分の関係にあったことで、その意味で「革命」は却って「迷惑なこと」だったと言えなくもない。

核兵器を持ってしまったことで、国家間の総力戦は事実上不可能になっており、その一方で安易な軍事的介入は冷戦時代よりも増えているのが現在だ。しかし現在、本当に問題なのは、民族や国家間どうしの争いではなく、環境・人口・食料など、民族や国家を容れている地球それ自体の存続に関わることだ。少なくとも人間が生き続けることを望む限り、眼前の軍事的な危機に右往左往すべきではなく、「人間の安全保障」という視点に転換することが望まれる、として結んでいる。無根拠に美化したお題目ではなく、具体的に取り組む対象として、地球とか人類といった概念を捉えなおす必要があるであろう。

（I橋）

※来年3月より、浦部教授による連続講座Ⅱ「憲法の考え方」が開催されます。詳しくは上記HPをご覧ください。

おとなの社会科見学 vol. 5

## 丸木美術館・埼玉県平和資料館再訪

2007年12月15日

人々からすべてをうばう「戦争」。  
平和を願う人々の表現から、  
戦争が人々から何をうばい、何を残すのか  
を考えました。

関東地方に今年一番の寒波が押し寄せてきた日に、埼玉県にある丸木美術館と埼玉県平和資料館を再訪しました。

埼玉県平和資料館は、戦争の記憶を風化させないために平成5年に建てられ、県民から寄せられた戦前・戦中に関する資料を中心に展示しています。

ユニークだったのが、戦時中の国民学校の様子を再現した疑似体験コーナーでした。国民学校とは、第二次世界大戦、太平洋戦争中日本に設けられた、初等教育と前期中等教育を行っていた学校のことです。国民学校は、こどもが鍛錬をする場と位置づけられ、国に対する奉仕の心を持った「少国民」





の育成がめざされていたともいわれています。再現映像では、「この戦争は正しい」という内容の授業をしていました。その時、サイレンが鳴り響きました。空襲です。すぐさま出口から防空壕に避難しました。土のうの上に腰掛け、爆撃機の爆音が聞こえなくなるのを待ちます。ブルブルと地響きまで再現されていてビックリしました。

当時の子どもたちは、薄暗い防空壕の中で、正しいことをしていると教えられている自分たちが住む町に爆弾が落とされることをどう感じていたのでしょうか。



午後から丸木美術館に向かいました。丸木美術館は、1967年に開館し、「人間が人間に対して行った暴力を描いた画家」丸木位里・丸木俊氏夫妻による画を展示しています。

1945年8月6日、原子爆弾が広島に投下され、9日には長崎にも投下されました。死者は20万人にも及びました。原爆投下の3日後、位里氏は故郷である広島に行き、そこで焼け野原が広がるばかりの光景を目の当たりにしました。俊氏は1週間後に広島に行き、ふたりで救援活動を手伝いました。それから5年、原爆の恐ろしさを伝えるために原爆の図・第一部「幽霊」を発表しました。

2階から第一部「幽霊」が展示されています。10月号の映像紹介や先月号でもお伝えしましたが、やはり現物の迫力はちがいました。大きさもさることながら、立ち止まってしばらく絵を眺めると、何かにおいたつような迫力を感じました。

連作は1階まで続きます。それぞれに解説が付いていて（美術館のホームページでも一つひとつ読むことができます）、俊氏（後で館の方の話でわかりました）の思いが込められた文章は絵と相まって見る人に訴えかけてきます。

別の部屋には「水俣の図」「アウシュビッツの

図」など、「原爆の図」よりさらに大きい絵が壁一面に展示されていました。その大きさは、夫妻の暴力に対する怒りが込められているようでした。

現在「小高文庫」として休憩所のようになっている2階のスペースは、丸木夫妻がアトリエとして使用していた部屋。丸木夫妻にまつわる書籍や画集、ビデオなどを手に取ることができます。

そこで、こたつを囲みながら夫妻を紹介したテレビ番組のビデオを観せてもらいました。

その中で、位里氏の母親、スマさんの、「ピカは人がおとさにゃおちてこん」という言葉が印象的でした。



そのあと、丸木夫妻のご親戚の方にもお茶をご馳走になり、美術館の敷地にまつわる面白い話から、一緒に住んでいた頃の丸木夫妻の様子などをうかがうことができました。

また、「お金がないから、美術館は『夏は暖房、冬は冷房』状態なんですよ。『演出ですか？』と言ってくれるお客さんもいるのですが」とおっしゃっていましたが、あの寒さはただ寒いだけではない、『人の想像を超えた惨劇』（ビデオより）が私たちに伝わって感じた寒さだと思いました。

（T本）

### 丸木美術館

<http://www.aya.or.jp/~marukim/sn/>

企画展も随時行っています。ぜひ足を運んでみてください！訪問は、バスが便利です。

東松山駅東口～浄空院入口 下車

高坂駅～丸木美術館北 下車



配偶者やパートナーなどの身近な間柄にある男性から女性に対して振るわれる暴力（ドメスティック・バイオレンス：DV）は女性の尊厳を踏みにじり、身体や心に大きな傷を負わせる犯罪行為です。

DV 被害者支援に対する理解を深めるために米国ドキュメンタリー映画の巨匠フレデリック・ワイズマン監督の『DV (Domestic Violence)』の上映を開催いたします。

この映画は、フロリダ州の DV 被害者を収容する施設「スプリング」の実情をとらえるドキュメンタリーです。HuRP 賛助会員の皆様にご案内いたします。ぜひお越しください。

日時：

2008年2月11日(月・祝)

11:30～17:00

会場：伊藤塾お茶の水校

(連絡先・03-5281-5377

お茶の水駅西口徒歩2分)

参加費：無料です

お問い合わせ：hurp@hurp.info

大川まで

カラダに平和を 自炊のススメ

## 19 キャベツと豚肉のトマト煮

ロールキャベツ、おいしいですよ～。でもいざ自分で作ろうとするとめんどうくさい思ったことはありませんか？わたしは一人暮らし（自炊）をはじめてすぐに思いました。「別にロールしなくてもいいんじゃないの？」そこでこのようなメニューを思いつきました。

材料：豚肉（小さく刻めるもの）、キャベツ、トマト、トマトケチャップ

手順：

- 1 豚肉は一口大に、トマトはぶつ切りに切る。キャベツは芯を取って葉をめくっておく。
- 2 水を1cm位入れ、キャベツの葉、の上に豚肉、トマトを入れ、ケチャップを少量かける。
- 3 2を繰り返す、とろ火で煮込み、最後に塩、こしょうで味をととのえる。

簡単でおいしくて、ヘルシー、寒い冬にオススメですよ！

もちろんお弁当にも！



・12月1日に北海道の芦別にて『芦別事件』を知る－事件が語る現代的意義』が催されました。現在のえん罪事件を考える際の道標ともいえる内容になりました。次回、詳しくご紹介いたしますので、お楽しみに！  
・あっという間に過ぎ去った2007年でした。皆様はいかがでしたか？来年もがんばりますのでよろしくお願いいたします！（T本）

